

令和7年度第1回八戸市美術館運営協議会

会議録

日 時： 令和7年10月29日（水）15：00～17：00

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

会 議 錄

日 時： 令和7年10月29日（水）15：00～17：00

場 所： 八戸市美術館 スタジオ

出席者： 別紙のとおり

発言内容：

○事務局： 定刻になりましたので、只今から、令和7年度 第1回八戸市美術館運営協議会を開会いたします。まず始めに、お手元の資料の確認をお願いいたします。それぞれの資料の右上には順番に資料番号を振ってありますので、不足などがございましたらお申し出ください。それでは、会議に先立ちまして、事務局を代表して、観光文化スポーツ部長の工藤から挨拶を申し上げます。

○部長： 八戸市観光文化スポーツ部長の工藤でございます。本日はご多忙のところお集まりいただき、誠にありがとうございます。本協議会では、委員の皆様の交代がありましたので、後ほど新任委員の紹介をさせていただきます。どうぞよろしくお願ひいたします。本日は、報告事項3件、協議事項1件を予定しておりますが、これらに限らず、皆様には大所高所から幅広いご意見を頂戴できれば幸いです。八戸市美術館が今後さらに発展し、地域の文化拠点として一層の役割を果たしていけるよう、全力で取り組んでまいりますので、皆様のお力添えを賜りますよう、よろしくお願ひ申し上げます。

○事務局： ありがとうございました。次に、本日の会議の出席者のご紹介でございますが、恐れ入りますが、紹介はお手元にお配りしている出席者名簿および席図をもってかえさせていただきますので、よろしくお願ひします。なお本日オンラインでご出席予定であった伊藤委員ですが、急遽予定が入ったということで、欠席になっております。また、馬渡委員もご欠席となっております。なお、新年度の人事異動に伴い、池田委員、坂本委員、堤委員が退任されました。その後任について、各団体に推薦をお願いし、新たに菅野委員、福田委員、高屋委員が新任委員としてご就任され、本日ご出席いただいております。ここで、新任委員の菅野委員、高屋委員、福田委員から一言自己紹介をいただきたいと存じます。

◆委員： それでは、一言ご挨拶申し上げます。このたび前任の池田美術統括監より引き継ぎ、美術統括監を務めることとなりました、青森県立美術館の菅野と申します。肩書は少々仰々しいものですが、基本的には学芸員でございます。私は1995年に県立美術館の準備室に入って以来、気がつけば30年が経ちました。その間、旧美術館を含め、八戸市美術館の皆様には準備室時代から大変お世話になってまいりました。今後は、少しでも恩返しとなるよう、微力ながら務めてまいりたいと考えております。どうぞよろしくお願ひいたします。

◆委員： 八戸工業大学の高屋と申します。このような場に参加するのは初めてで、まだ不慣れな点も多くございますが、皆様のご指導をいただきながら、尽力してまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

◆委員： 八戸学院地域連携研究センターの福田でございます。堤委員の後任として、本日

出席させていただいております。私は八戸の出身で、昨年3月に日本大学を定年退職し、約25年ぶりに八戸へ戻ってまいりました。その前には、八戸大学に12年間在籍しておりました。専門は美術とは異なる法律分野であり、またスポーツではアイスホッケーを続けておりまして、美術とは少々縁遠い経歴ではあります。実は関野潤一郎氏の版画をいくつか収集しており、こうした分野にも興味を持つております。今後ともどうぞよろしくお願ひいたします。

○事務局： ありがとうございました。次に、本会議は、八戸市美術館運営協議会規則第4条第2項により、委員の過半数が出席しているため、成立していることを報告します。なお、会議の公開・非公開についてですが、八戸市附属機関の設置および運営に関する要綱の第5条第2項におきまして、「個人のプライバシー又は政策形成過程における情報等に係る審議内容で、公開することにより当該附属機関の適正な議事運営に著しい支障が生ずるおそれがある場合を除き、会議を公開すること」とされております。このため、本日は報道関係者による傍聴・取材を受け付けております。また、会議後に作成した議事録は、発言者名を伏せてホームページなどで公開させていただきますので、よろしくお願ひします。それでは、ここからの議事進行につきましては、日比野会長にお願ひいたします。

◆会長： よろしくお願ひいたします。それでは、最初の議題に入らせていただきます。これまで副会長は坂本委員にお願いしておりましたが、委員の交代がございましたので、改めて本協議会の副会長を選任したいと思います。副会長の選任につきましては、互選により行うこととなっております。つきましては、どなたかご意見、ご推薦などがございましたらお願ひいたします。

◆委員： 副会長の選任につきまして、前任の坂本学長と同様に、市内で唯一の美術専門学部を有する八戸工業大学・感性デザイン学部の高屋喜久子教授が、副会長として適任であると考えております。つきましては、高屋教授を副会長として推薦いたします。

◆会長： ただいまの互選において、高屋委員のお名前が挙がっております。皆様、ご異議やほかにご意見などはございますか。

（全委員、拍手により承認）

◆会長： それでは副会長は高屋委員に決定いたしました。よろしくお願ひいたします。

◆委員： よろしくお願ひいたします。

◆会長： 次に議事の2番目に入ります。報告事項が3件あります。まず1番目、第1期八戸市美術館中期評価について、事務局から説明願います。

報告事項 ①第1期八戸市美術館中期評価について

○事務局： それでは、資料1をご覧ください。第1期八戸市美術館中期評価についてご説明いたします。まず、1の趣旨についてですが、令和6年度に、令和3年度から令和5年度までの事業を対象として評価を行い、その結果を「第1期八戸市美術館中期評価報告書」として取りまとめました。この評価報告書を踏まえ、明らかとなった課題および今後の取組内容を基に、第2期八戸市美術館中期運営計画を策定しております。しかしながら、令和6年度に実施した事業については評価が未

実施であったため、当該年度の事業評価を改めて行い、計画期間全体を対象とした中期評価報告書を今後取りまとめてまいりたいと考えております。続いて、2の今後の予定ですが、11月より、計画期間全体を対象とした評価作業を実施し、次回の運営協議会において、その内容をご報告するとともに、公表したいと考えております。説明は以上となります。

◆会長： ただいまの説明につきまして、何かご意見、ご質問はございますか。特にご発言がないようですので、次の案件へ移らせていただきます。続きまして、報告案件②の登録博物館の登録について事務局よりご説明をお願いいたします。

報告事項 ②「登録博物館」の登録について

○事務局： 資料2をご覧ください。登録博物館の登録についてですが、当館は令和7年6月17日付けで博物館法に基づく登録博物館として登録され、青森県教育委員会より告示されました。令和5年4月1日施行の改正博物館法に基づく新たな博物館登録制度のもとでは、県内の博物館施設として初めての登録となっております。本年2月13日に実地審査が行われまして、本日ご出席の菅野委員と、青森県文化財審議委員の葉山委員に当館においていただき、審査いただきました。それでは、1の登録内容ですが、こちらに記載されている内容が登録簿に記載されております。続きまして、2の登録にあたり付された意見およびその対応についてです。登録にあたり、意見をいただきております。審査担当者の方からは、当館が研究紀要を発行していないため、調査研究の成果を十分に蓄積・発信できる環境が整っておらず、登録博物館としての活動が十分でないことから、今後、紀要を整備し、順次公開に努めるようご意見をいただきました。(2)の今後の対応ですが、このご意見を踏まえ、令和8年度より研究紀要を整備し、順次公開に取り組んでいくこととしております。続いて、3の参考になりますが、(1)登録博物館になることのメリットとしては、登録博物館になることにより法律上の地位が付与され、信用や知名度の向上が期待できること。また、特別交付税の申請や美術品補償制度の利用など法律上の優遇措置を受けられるほか、文化庁による博物館機能強化推進事業の活用も可能となる、というメリットがございます。(2)登録博物館になることに伴い生じる義務などとしては、博物館資料のデジタルアーカイブ化に努めること、関係機関との連携協力を図り文化観光の推進など地域の活力向上に寄与するよう努めること、そして運営状況について県教育委員会へ定期的に報告することとなっており、毎年度6月末までに県に報告する必要がございます。資料の説明は以上です。

◆会長： 意見にあった研究紀要についてですが、確認ですが、登録申請時には研究紀要を発行していないくとも登録そのものは可能だった、という理解でよろしいでしょうか。

○事務局： 研究紀要の発行は、申請時の必須条件ではございませんでした。

◆会長： より登録博物館として望ましいという助言を受けたということですね。8年度より研究紀要を整備して、順次公開を進めていくことになります。ただいまの説明につきまして、何かご意見、ご質問などはございますか。

特ないようですので、次の案件に移らせていただきます。次に、報告案件③「令和7年度事業実施状況等について」、事務局から説明をお願いします。

報告事項 ③令和7年度事業実施状況等について

○事務局： ここからは、市の政策における当館事業の位置づけについてご説明いたします。

資料3をご覧ください。当館の各事業は、市の政策における4つの計画に掲載されております。事業を計画に盛り込むことで、市施策としての重要性を示すことができるため、積極的に掲載を進めております。1つ目は「第7次八戸市総合計画」です。これは、市の目指すべき姿と、その実現に向けた施策全般の方向性を示す、市政の最も根幹となる計画です。この計画に基づき策定される単年度戦略「未来共創推進戦略2025」においては、戦略4「個性豊かな魅力あるまちづくりの推進」、戦略6「未来を創る子どもファーストの推進」に、当館の事業を掲載しております。ここで記載されている「八戸市美術館運営事業」は、主に展覧会やプロジェクト関係の事業を指しております。2つ目は「はちのへ創生総合戦略」です。これは第7次総合計画の政策分野を横断し、人口減少対策に官民が一体となって取り組むための戦略です。基本目標1「八戸が好きになる、未来を創る『ひとつ』を育てる」の中の、施策1「次代を拓く人を育む」、施策2「選ばれるまちをつくる」に、当館関連の事業を掲載しております。3つ目は「第2期八戸圏域連携中枢都市圏ビジョン」です。地域の個性が輝き、自立した八戸圏域を将来像とし、圏域全体の基本目標や成果指標を定めたビジョンです。この中では「高次の都市機能の集積・強化」の項目に、美術館運営事業が位置づけられております。4つ目は「第3期八戸市次世代育成支援行動計画」です。次世代育成支援対策推進法に基づく計画と、子ども・子育て支援法に基づく事業計画を一体的にまとめたものです。基本目標3「心身の健やかな成長に資する教育・生活環境づくり」、具体的施策(3)「生きる力を育てる機会の充実」に、当館の関連事業が掲載されております。また、先日の市長選において熊谷市長が2期目の続投となりました。参考として、選挙時に示された公約を資料に添付しております。特に1・3・6・7・8の項目は当館事業と深く関係し、市長も所信表明において新規・継続事業に力を入れる旨を述べられております。以上で説明を終了いたします。

○事務局： 続きまして、資料4をご覧ください。令和7年度事業進捗状況等についてですが、この資料では、今年度上半期の実施状況と下半期の計画についてご説明いたします。まず、1の上半期の主な事業につきましては、展覧会およびプロジェクトを担当した学芸員より説明いたします。

○事務局： まず、1の①企画展「浮世絵展 コンニチは タイカンする江戸文化」についてご説明いたします。本展は、今年4月19日から6月15日まで、約2か月間にわたって開催いたしました。内容につきましては、こちらにも記載のとおり、浮世絵の基本的な知識から、マニアックな内容まで幅広く取り上げ、浮世絵作品や版本、版木など、約200点を展示いたしました。タイトルの「コンニチは」は、浮世絵と初めて出会う「こんにちは」という意味と、浮世絵を通して「今日(コンニチ)」を見つめるというダブルミーニングになっています。また「タイカンする江戸文

化」については、江戸文化を大きく捉え、当時の空気を身体で感じる展覧会というコンセプトで開催いたしました。作品は、共創パートナーである近隣の八戸クリニック街などミュージアムから約 160 点を借用したほか、神奈川県藤澤浮世絵館、はだの浮世絵ギャラリーからも作品をお借りして展示いたしました。本展は、共創および市内連携の要素が多く盛り込まれた点が特徴で、展示内でのミュージアム同士の連携に加え、市内の教育コーディネーター団体、さらに八戸高等支援学校の聾者かつ弱視の生徒さんとの連携企画を実施いたしました。また、主催事業にとどまらず、市内の様々な団体が共創企画として、ワークショップや展覧会を主催し、地域内の多様なつながりが感じられる展覧会となりました。観覧者数につきましては資料のとおりでございます。以上で説明を終わります。

○事務局： 続いて、②の「ポケモン×工芸展 美とわざの大発見」と、③の「コレクションラボ 010 西野こよ」について説明いたします。まず「ポケモン×工芸展」ですが、人間国宝から若手作家まで、約 90 点の作品を紹介する展覧会で、伝統的な超絶技巧の作品から、現代的なインсталレーションまで幅広く展示し、大人は子どもからポケモンを教えてもらい、子どもは大人から工芸について教わりながら鑑賞するという、とても印象的な光景が見られました。展示に加えて、当館では初めてオンラインチケットを導入したほか、八戸市と隣接する階上町に設置されている、ポケモンが描かれたマンホール、通称「ポケふた」との相互送客を図るパネル展示、市内バスの 1 日乗車券利用者への特典シール配布など、館外にも広がる事業展開を行いました。続いて、「コレクションラボ 010 西野こよ—表現への挑戦」では、青森県南部地方の工芸である南部菱刺しの復興・普及に取り組み、現代作品としての創作活動も行った西野こよ氏の作品を展示いたしました。本展では、八戸工業大学の川守田先生にご協力いただき、菱刺しに関する講演会の開催や、美術館向かいのサテライトキャンパス「ばんらぼ」での企画も実施し、連携事業を充実させることができました。地元に根づく工芸であることから、市内の皆様には好意的に受け止めていただき、現在活躍されている南部菱刺し作家の方々が集まり交流や情報交換を行う場にもなりました。現代の工芸振興においても非常に意義深い展覧会になったと感じております。

○事務局： 続きまして、2 のアートファーマープロジェクトについて、説明いたします。まず1 つ目ですが、「ものづくり部 体験ワークショップ」という取り組みを、今年度からスタートしています。館内で気軽にものづくりに触れていただく機会をつくるということと、それをアートファーマーの皆さんと一緒に、サポート役として、あるいは主役として活動していくという趣旨で企画しているものです。現在 3 つのワークショップを行っています。1 つ目は「エンジョイ！ぬり絵 DAY」です。こちらは漆畠委員にもご協力いただいた企画で、8 月以降、月に 1 回、第 2 土曜日に実施しています。地元のアーティストや八戸工業大学第二高等学校の美術コースの高校生の方にオリジナルのぬり絵をつくっていただき、子どもたちをはじめ、来館者のみなさんに楽しんでいただく内容です。描き終えると、ぬり絵の作者に先生役として花丸をつけてもらったり、「こうするともっと楽しくなる

よ」といったアドバイスをもらいながら楽しむ企画です。2つ目は「くにゅぎの森 魔法学校」です。市内在住の少女板画作家・イラストレーターのしばやまいぬさんと進めているプロジェクトで、しばやまいぬさんの版画の世界から飛び出した森を実際につくてしまおうという取り組みです。紙工作の版画でつくったシートを切ったり貼ったりして虫を制作し、この冬に森をつくり、子どもたちに虫取りを楽しんでもらう予定です。その準備として、6月から月1回程度、アートファーマーのみなさんと一緒に虫づくりを続けています。3つ目は「かぎ針で絵を編む 引きそろえと細編みでタペストリーをつくろう」というワークショップです。こちらは9月に実施しました。八戸市出身で、八戸工業大学第二高等学校美術コース卒業、現在は神奈川県在住のアーティスト・加藤千晶さんをお招きし、加藤さんの作品制作の世界観を体験していただくもので、来館された方々と一緒に編み地をつくり、糸を引きそろえたりするという内容でした。かぎ針経験者のアートファーマーを募集して、お客さまと手ほどきを共有しながら一緒に作品づくりを行いました。これらのワークショップのアーティストは、漆畠さん、しばやまいぬさんは、2024年に行われた青森5館連携「AOMORI GOKAN アートフェス 2024」で当館のプロジェクトに関わっていただいた方々で、加藤千晶さんは春に開催した「八戸アーティストファイル 2025」に参加されたアーティストです。こうした形で、これまで美術館に関わっていただいたアーティストとつながっています。次に、(2)「建築ツアーガイド」です。開館当初から行っている取り組みですが、アートファーマーがガイドとなり、自分が好きなスポットや面白いと感じているところを来館者に紹介するツアーです。最近は海外経験のあるアートファーマーもあり、海外のお客様に英語で説明する機会も増えてきています。(3)「美術館広報部」ですが、今年から本格化した事業になります。アートファーマープロジェクトに関わっているコアメンバーの方々が、美術館の魅力をもっと発信したいということで始まった取り組みで、現在はラジオ出演を通してアートファーマーの視点で美術館の面白さを紹介したり、Web メディア「note」にアーティストへのインタビューや展覧会の感想などを掲載して発信する活動を行っています。最後に(4)「アーティストプロジェクト」です。新しい美術館のもう一つの軸として、アーティストとともに長期的に展開するプロジェクトを開始しました。現在は、美術家・ファッショントレーナーで、装いの行為とコミュニケーションの関係に着目して活動されている西尾美也さんとプロジェクトを計画しております。7月にはキックオフとして、西尾さんにこれまでの活動をご紹介いただきました。今後、今年を含めて3年間、継続して取り組んでいく予定です。

○事務局：

続いて、学校連携事業についてご説明します。まず1つ目、全体会議についてですが、6月に全体会議を開催し、今年度の事業方針の確認を行いました。今年度は、学校連携ラボの活用や、学校連携プロジェクトチームの新メンバー募集などを主な目標としています。2つ目ですが、現在開催中の「コレクションラボ 011 きっとそこには」に関連して、学校連携プロジェクトチームの先生方と一緒に、作品鑑賞をサポートするワークシートを3作品分作成しました。子どもたちと鑑賞

してみたい作品という視点で、作品選定から先生と一緒に進めました。先生それぞれが、作品を比較する、五感に働きかける、作者の意図を考えるなどのテーマを設けて作成しました。また、このワークシート作成に携わった先生方が所属している小中学校の児童生徒を大型バスで美術館に招待し、コレクションラボなどの鑑賞を行う予定です。今回は小学校の先生2名と中学校の先生1名が参加してくださいました。小学校2校は全校児童で来館、中学校は美術部の生徒が来館する予定となっています。参加された先生の一人は、「最近の子どもたちは、スマホのショート動画のようなものから、何もしなくても情報が入ってきてしまう環境にあるので、自分で考える機会が少なくなっている」とお話されていました。また、「今回ワークシートをつくったことで、実際に子どもたちが作品の前に立ったとき、自分で考えたり、想像したり、感動したりすることにつながると思う」とお話しされており、先生の声を聞きながら、先生と一緒に新しい仕組みができる、関係性が広がっていると実感しているところです。3つ目、「美術館新聞部」についてです。こちらは八戸工業高校の美術部を中心に活動している美術館新聞部で、令和3年度から始まり、今年度で5回目の発行となります。毎年、年度末に発行していますが、これまでアーティストや周辺の店舗への取材を行っており、昨年度は来館者へのインタビューを行い、それを記事にしました。高校生と小学生と一緒に取材を行い、高校生が小学生をサポートしながら記事づくりを進めています。その他として、資料には記載していませんが、月に1回程度、中学校2校で「朝鑑賞」という取り組みも継続しています。1つは鰹中学校で、昨年度に続き今年度も研修を行う予定です。実際に朝鑑賞を行う中で課題が見えてきているとのことで、今年度の研修では生徒へのアンケート実施や、課題解決に向けた内容の講義を行う予定です。また、先ほどのプロジェクトのところでも触れましたが、今年は八戸工業大学第二高等学校の美術コースの生徒とも連携しており、校内で美術館に関する講義を行ったほか、今後コレクションラボなどの鑑賞会も実施する予定です。

○事務局：

続いて、4の大学・高専連携事業についてですが、大学資産を活用したアートの学び事業については、八戸学院地域連携研究センターが中心となって事業を展開しております。(1)「高等教育機関のセミナー事業」は、市内にある八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部・八戸工業大学・八戸工業高等専門学校の教員が講師となり、美術とは異なる分野の視点からイベントを開催しています。第1回目の「ブリリアントミネラル」は、八戸工専の土屋校長先生が講師となり、石をスライスして顕微鏡で観察するワークショップを行いました。続いて(2)「アートマネジメント事業」については、芸術・文化活動と社会をつなぐための業務、方法論やシステムについて学ぶ講座を開催して、学生と社会人が交流したり、学びを考える場をつくっています。①「小さい庭を作つてみよう」は、9月13、14日の2日間にわたり開催いたしました。②「曾孫が語る前原寅吉」は、10月4日に開催いたしました。前原寅吉さんは、八戸にお住まいだった方で、ハレー彗星を初めて観察した方として知られており、曾孫の前原俊彦さんにお話をしていた

だきました。続いて、(3)「アート×幼児教育」は、子育て世代が美術館に気軽に来館できる機会と、学生の実践的な学びの場を創出することを目的に、八戸学院まちなかラボを活用した取り組みを行うものです。①「託児ルーム」では、八戸学院まちなかラボに、保育士を目指している学生が運営する託児スペースを開設いたしました。続いて、5の「賑わい創出事業」ですが、美術館を身近なものに感じてもらうとともに、中心街の活性化に寄与することを目的として、館内や美術館前広場を利用したイベントなどを開催しました。(1)「ヨルニワ」は、更上閣、はっち、美術館を会場にして、キッチンカーと飲食屋台と音楽ライブを楽しんでいただくイベントです。(2)「音楽のタベ」も同様に美術館前広場にて音楽と飲食を楽しむイベントです。今年は初めて中心街のはちのへホコテンと連携しました。700名を超える来場者がジャズ演奏を楽しみました。続いて、(3)「八戸三社大祭賑わい広場」ですが、日本を代表する山車祭りである八戸三社大祭の期間中に、マエニワに飲食屋台やキッチンカーを出店したほか、開館時間を21時まで延長、テラスを開放し、市民や観光客の方が滞在できる場を提供しました。続いて、6の「共創パートナー事業・共催事業」です。(1)「共に創る！アートがまちづくり魅力発見事業」ですが、八戸歴史文化発信事業実行委員会と連携しまして、美術館の共創パートナーを募って、それぞれが行っている文化芸術イベント情報を紹介するという取り組みになっております。LINE公式アカウント「ヨッテミッテ」で毎週金曜日にイベント情報を発信しております。続いて(2)の「白マドの灯『街の灯りプロジェクト』」は、八戸クリニック街などミュージアムの主催になりますが、美術館は場所や機材を提供して共催として実施しております。具体的には、美術館の外壁に名作映画などの映像を投影して、文化的な街の景観を演出することで、市民に映像文化に親しんでいただく機会を提供しているものです。続いて、7のその他ですが、(1)「博物館実習」は、学芸員資格取得のため、8月18日から8月22日まで開催いたしました。続いて、(2)「マチナカまるっと1日体験事業」は、市内の中高生に中心街の公共施設で働く体験の場を提供して、まちづくりへの関心を高めて、地元への愛着を育むことを目的としている事業です。はっち、美術館、ブックセンター、YSアリーナの4つの施設を巡って、業務スタッフ体験や1日館長体験を行いました。スタッフ体験には中学生3名と高校生12名が来ました。1日館長体験には高校生3名が来ました。アーティストのしばやまいぬさんとの交流や、1日館長の体験を撮影して、現在YouTubeで公開しています。次に、IIの下半期の主な事業になります。1の①現在開催中の「古代エジプト美術館展」は、日本唯一の古代エジプト専門美術館である古代エジプト美術館渋谷のコレクションを紹介しております。主催はデーリー東北新聞社です。続いて②「コレクションラボ011 きっと、そこには」は、作品に描かれているものや、そこには描かれていないものを探り、想像しながら見ることで新たな鑑賞の楽しみ方を探る展覧会です。③特別展「GOMA展 WONDER」は、青森県在住のGOMAさんによる展覧会で、県南地方では初開催となります。令和4年夏に七戸町で行われたGOMA展では、4万人以上の方が訪れたということです。続いて④「コレクシ

ヨンラボ 012 渡辺貞一」は、青森市出身で、八戸ゆかりの作家と交流があった渡辺貞一さんの作品および世界観を紹介するコレクション展になります。続いて、2「学校連携事業」の④「はみ出す力.Vol.7」開催ということで、全国の幼保・小中・高・大学の図工美術教育の授業や造形活動の様子、その実践から生まれた作品を展示する内容になっております。続いて、3「大学高専連携事業」ということで、先ほどもご説明した内容にはなりますけども高等教育機関アートセミナー事業として、第2回は「流れの不思議と美の世界」として、八戸工業大学学長の船崎健一様による講演となっています。第3回は現在調整中で、第4回「親子で作ろう新幹線模型」は、福田委員が講師となって、ボール紙や厚紙に印刷された新幹線や鉄道を切り取って組み立てるという内容です。続いて、(2)「幼児教育の託児ルーム」については、次回は1月25日開催となっております。②「ワンパーク」は、今年度初めて開催しますが、小さな子どもとその家族で交流し、遊びからアートの創造につながるきっかけをつくるという内容です。③「ベビーファーストデイ」は、以前から取り組んでいる内容になりますが、保育所を目指している学生が、親子連れの方の展覧会鑑賞時のサポートや託児サービスを行う内容になっております。続いて、4「賑わい創出事業」ですが、(1)「八戸えんぶり in 美術館」として、八戸えんぶり期間の2月17日から2月20日のうち1日、ジャイアントルームにて市内えんぶり組の公演を行うものです。(2)「春休みイベント」として、令和8年2月から3月の期間に、館内で親子で創作を楽しむことができるイベントを開催する予定です。5「共創パートナー事業・共催事業」については、先ほどご説明したとおり、「共に創る!アートのまちづくり魅力発見事業」の下半期の取り組み内容として、中心街の店舗を紹介する「街なかアートマップ」を作成します。また、共創パートナーに集まつていただいて、ミーティングを行い、今後の共創企画につなげるような話し合いをしたいと考えております。資料4の説明を終わります。

◆会長： ありがとうございました。報告事項③について、事務局から報告いただきました。資料3では、市の政策において美術館に求められている役割に対し、この美術館がどういう位置づけで、どのように応えているのかというところですが、資料3を見ると、「個性豊かな魅力あるまちづくりの推進」、「未来を創る子どもファーストの推進」、「次代を拓く人を育む、選ばれるまちをつくる」など、こういった目的のもとに美術館事業を行っているのだと改めてわかりました。そして、展覧会だけではなくて、その後に続く項目として、アートファーマープロジェクト、学校連携、大学・高専連携事業、賑わい創出事業、共創パートナー事業、関連事業と、本当に様々な取り組みがあるというのが、この美術館の大きな特徴だと思いました。一般的な美術館の報告書だと、展覧会がずらっと並んで、その後にその他の関連事業として、写真もほとんどなく項目だけが紹介される、そういうボリューム感のものが多いんですが、この資料のつくり方を見ると、展覧会と同等、もしくはそれ以上に、いろんな事業に力を入れているということがよく伝わってきます。写真の数やページの取り方を見ても、そのあたりは強く感じましたし、

これこそが八戸市美術館の特徴であり、目指す姿なのだと受け止めました。このあと、皆さんから意見を伺いたいと思いますが、その前に私からも一言申し上げます。やはり、限られたマンパワー、予算、時間の中で、よくこれだけの事業を展開されているなと感心しています。資料を見ますと、共催と書いてあるものもあれば、そうではないものもあって、美術館が企画から運営、予算まで全て主体となっているものもあれば、逆に外部からの提案を受けて実施しているものもあります。最後の方の共創パートナー事業などを見ると、美術館が主導しているもの、アイデアや運営を外部団体が担っているものなど、多様な関わり方が見受けられます。こうした多様な関わり方が見えてくること自体、とても良い特徴だと感じています。

○館長： ありがとうございます。おっしゃるとおり、本当にいろいろな形があります。展覧会についても、上半期に挙がっているものは主催事業であったり、実行委員会方式であったり、一方で、今開催している「古代エジプト美術館展」のように巡回展で、主催がデーリー東北新聞社さんというケースもあります。展覧会の中でも主催と共催、様々な形があります。また、大学・高専連携事業についても、大学や高専の皆さんに協力していただき、企画段階から一緒に進めているものもあります。共創パートナーとの事業も同様で、いろいろな関わり方があり、多様な形態の事業がある状況です。

◆会長： 事業内容のバランス、予算面での調整、マンパワーの配分等、様々な点を考慮しながら事業を実施していると思いました。では残りの時間で、本日の各報告に対するご意見、またその他ご発言があれば、この機会にいただければと思います。

◆委員： 今年4月より、八戸学院大学地域連携研究センターとして初めて、まちなかラボを活用し、「ウェンズデイナイトカフェ」をスタートいたしました。多様な人に集まっていたり、コーヒーを飲みながらディスカッションし、八戸市の「知」を発信する場になればと考えております。資料を拝見していて、特に面白いと感じたのは、この美術館でバンケットのような催しを実施していることです。ジャイアント食堂などもその一例かと思います。海外の学会では、美術館や博物館を会場にバンケットを行うことがよくあり、それに似た面白い試みだと感じました。今後、VISIT はちのへとタイアップして、コンベンションを行ってみてはどうかなと思いました。私自身、八戸と東京を往復する生活で、八戸市美術館をゆっくりと見られていない状況ですが、近いうちにしっかり見学したいと思っています。今後、新たなアイデアが出ればご提案したいと思います。八戸学院大学地域連携研究センターとしては、この美術館を含む様々な施設・組織と連携し、「美とアート」をテーマにした事業を実施しています。前期には「小さな部屋を作つてみよう」や「曾孫が語る前原寅吉」など、これまでとは異なる視点からの企画も行い、高校時代の同級生にも協力を得ながら取り組みました。美術に限らない多様な語りの場を生み出せる点は非常に良い試みだと感じております。来年度のアートマネジメント事業では、次は誰に協力を依頼しようかと検討しているところです。また、2月には第4回「大学資産を活用したアートの学び事業」として、「親子で

作る新幹線模型」を予定しています。もともと私自身が鉄道好きで、N ゲージ模型も考えましたが、小さすぎて色塗りに向かないため、段ボール紙でつくる大きめの模型を採用しました。あらかじめ着色して印刷するのではなく、真っ白な状態でつくるつてもいい、親子で自由に色を塗ってもらうほうが面白いというアドバイスを三澤委員からいただきましたので、その方向で進める予定です。この美術館は、単に作品を展示するだけではなく、美の世界を創造する場として非常に面白いと感じています。

◆委員：この会議には久しぶりの出席となりますが、その間にも着実に 100 年後の美術館づくりが進んでいると感じました。市民同士が出会い、新しい世界へ踏み出す入口となるような、美術館の役割がより明確になってきており、大いに期待しております。私は学校連携の分野を専門として関わっており、先ほど報告のあった鮫中学校の朝鑑賞の取り組みについてですが、学校では美術の時間がどんどん減少しており、子どもたちが美術に触れる機会が非常に限られています。そういう中で週 1 回、朝の 10 分間だけでも作品を鑑賞する時間を設けることは、子どもたちが美術に興味を持つ貴重なきっかけになります。これを市内全ての小中学校で実施できれば、美術に親しむ子どもが増え、将来的に八戸市美術館へ足を運ぶ層の拡大につながるのではないかと考えています。鮫中学校の朝鑑賞は 2 年目に入り、データも蓄積されており、非常に期待しています。美術館の事業としては将来的に美術館を利用する市民を育てるという点で、こうした種蒔きは大変重要だと思っています。また、先ほど話題に出た「はみ出す力展」は、全国の小中学校の優れた実践を紹介する展覧会であり、マスコミ等で学校教育が批判されがちな中、現場から改革しようという有志が自費で企画しているものです。八戸市美術館には共催として加わっていただき、会場提供など協力をいただきました。昨年度の開催時には全国から美術教育を学ぼうとする人々が集まり、八戸や青森の人々との交流が生まれました。また、同時に実施した「ほろよい鑑賞」も大変好評で、全国の教員同士が仲間としてつながる貴重な場となりました。このような取り組みは他の美術館には見られない特徴であり、大変面白く意義深いものだと感じています。これらの取り組みは必ずしも派手ではありませんが、一歩ずつ着実に前へ進んでいますので、30 年後には、中学校を卒業した子どもたちが朝鑑賞で八戸の美術作品を知り、美術館に行くことが当たり前になる、こうした地域づくりが実現しているのではないかと非常に期待しています。

◆委員：ものづくりに関するワークショップが年々充実してきているという印象を持っています。展覧会に関連したワークショップや、アートファーマープロジェクトによるワークショップなど、年間を通して多様なプログラムが開催されており、鑑賞だけでなく「つくる楽しさ」を体験できる美術館になっている点がとても素晴らしいと感じています。つくる楽しさだけではなく、想像力や感性を働かせる場として機能している美術館だと思っています。また、学芸員からも話があったとおり、現在の中高生は考える機会が非常に少なくなっています。スマートフォン中心の生活の中で、空いた時間は動画を見てインプットをすることが多く、自分

の意見を話したり、考えたり、アウトプットする機会が減っているのが現状です。ただ、動画に触れていること自体が必ずしもマイナスではなく、普段授業で扱わないような日本画の技法を TikTok で見たことがあるという生徒もあり、意外な学びにつながっていることもあります。こうしたメディアとの関わりを、より前向きに活かせるよう、私たち教員も工夫していきたいと考えています。また、先日中心街で開催された「はちのへホコテン高校生版」に生徒会の生徒が参加し、缶バッジづくりの小さなお店を出しました。昨年は小さなお子さんが中心でしたが、今年は親子で参加する家庭が多く、親子で楽しめるものづくりの価値を実感しました。高校教員としては、美術館で学んで終わりではなく、美術館で得た学びをホコテンや地域の様々な活動に活かし、さらに広げていけるよう、生徒の取り組みを後押ししていきたいと思っています。引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

◆委員： 本日、コレクション展を拝見しましたが、大変素晴らしい内容でした。美術館には何かを見せてもらう場所というイメージが一般的にありますが、八戸市美術館は、来館者が主体となって何かを感じたり活動したりできる場を常に用意している点が特徴だと感じています。「古代エジプト美術館展」のような企画であっても、来館者を主役にする仕掛けがあり、非常に魅力的な美術館になっていると実感しました。コレクションラボについても、訪れるたびに新しい視点があり、とても面白いと感じています。コレクションを活用した展覧会は様々な工夫が必要だと思いますが、知恵を絞った取り組みが、他の活動にも良い影響を与えていているのではないかと感じました。本日、はっちにも立ち寄りましたが、教育旅行の高校生の団体が多数訪れており、ボランティアの方が各階で説明されていました。現在、京都など従来の教育旅行先はインバウンドで混雑しており、子どもたちが活動しにくい状況になっているため、目的地を東北へシフトする学校が増えているそうです。はっちのものづくりスタジオの方に伺ったところ、東北、とくに八戸のような規模の街は、ゆっくり見学ができる説明も十分に聞ける、子どもたちが活動しやすい、と評価している先生方もいらっしゃるとのことでした。そのような教育旅行のニーズに照らしても、今日のコレクションラボのような展示は非常に魅力的であり、八戸市美術館が観光面においても大きな可能性を持つ施設だと感じます。十和田市現代美術館がアート好きが訪れる美術館として確立しているのに対し、八戸市美術館は教育に資する見せ方をしているので、この点を VISIT はちのへとも連携して積極的にアピールし、はっちとの周遊性を高めることで、中心街での滞在時間を延ばし、教育旅行をより充実させることも可能だと思います。教育旅行はまさに誘致の好機にありますので、首都圏の学校が、「今年も八戸へ行きたい」と言ってくれるような働きかけを期待しています。私自身、宮城県などで教育旅行の誘致に携わる機会がありますが、山形なども非常に熱心に取り組んでいます。八戸は距離の点で不利に見えるかもしれません、種差海岸をはじめ、市街地にも優れた文化施設が凝縮しており、子どもたちにとって魅力的な訪問地になると感じます。今後、さらに強く発信していくと良いと思います。

- ◆委員： 新人の高屋でございます。資料4の1ページに記載の巡回展「ポケモン×工芸展」について、観覧者数が4万3,081人と、最高入場者数を更新したとあり、大変喜ばしいニュースだと感じました。美術館の皆様のご尽力の賜物だと思います。開催期間は約2か月とのことですが、私も手元で概算してみたところ、八戸市の人口約21万人とすると、5人に1人以上が来館した計算になり、非常に大きな反響を得た展覧会だったと受け止めています。私の周囲にも複数回訪れたという方が多く、私自身も学生とともに鑑賞し、大変楽しく、学生も非常に喜んでおりました。見応えのある展覧会であったと感じています。ここで一点、質問させていただきたいと思います。この4万3,000人超という来館者数について、何か特別な要因や工夫があったのか伺いたいと考えております。例えば、リピーターが多かったのか、県内と県外の割合はどうだったのか、資料に、北海道・東北エリア初開催とありますが、その影響は大きかったのか。また、小学校や中学校などの団体鑑賞が多かったのかなど、来館者増につながった背景があれば、お聞かせいただければと思います。
- 事務局： ご質問ありがとうございます。4万3,000人という過去最高の来館者数を更新した要因についてですが、第一に、ポケモンというコンテンツ自体が持つ圧倒的な力が大きかったと考えております。日本で最も海外に輸出されているコンテンツの一つと言われるほどで、実際に海外からの来館者も多く見受けられました。それ以外の点については、広報やCMといった広告関係にも、通常の展覧会より多くの予算を投入したほか、多くのお客様が来館されることを想定して、オンラインチケットを初めて導入したことで、スムーズにご観覧いただけるよう工夫を行いました。また、オンラインチケット会社からのデータによりますと、来館者は県内が約6割、県外が約4割で、通常の展覧会より県外からの来館者が多かったことが特徴です。市内の皆様にも大変楽しみにしていただき、多くの方に足を運んでいただけたと認識しております。
- ◆委員： ご説明ありがとうございます。来館者を拝見して、小さなお子さんからご家族連れ、ご高齢の方まで、非常に幅広い年代の方々が楽しんでいる印象を受けました。うろ覚えではありますが、小学校4年生のときに美術館を訪れた経験のある子どもは、大人になり親になった際に、自分の子どもを美術館へ連れて行く割合が高い、という調査結果があったことを思い出しました。具体的な数値は忘れてしましたが、今回の取り組みが将来的な来館者層の形成につながるのではないかと感じています。今後も、来館者数のさらなる増加を目指して取り組んでいただければと思います。ありがとうございました。
- ◆委員： 本日の報告を伺い、4～5万人を動員する大規模な展覧会から、十数名規模のワークショップまで、同じレベル感で丁寧に取り組んでいる姿勢がよく伝わってまいりました。人数に関して申し上げますと、4,000～6,000人規模の展覧会と、その10倍規模の展覧会では、構造が大きく異なります。アニメコンテンツや宮崎駿作品関連などを扱えば確実に集客できるとわかっています。しかし、八戸市美術館は必ずしもそちらの方向を志向しているわけではなく、より小さな規模でも深

い影響を与える取り組み、特に子どもたちへの働きかけを重視しているのではないかと感じています。先ほど委員からもご指摘があった通り、若い世代は日常的にスマートフォンに多くの時間を割き、情報のインプットは豊富である一方、リアルな手触りのある思考や表現、創造的な試みに弱くなっている現状があります。そうした状況に対して、美術館が何を提供できるのか。リアルとバーチャルのあいだをどう橋渡しするのかが、大きな課題だと私自身感じています。近年では、名画鑑賞といった従来型の展示だけではなく、光や映像を活用した「イマーシブ（没入型）」の展示手法が増えていています。八戸市美術館の空間構造を考えると、こうしたイマーシブな展示にも一定の親和性があるのではないかと考えており、大規模動員型の企画の一案として、検討の余地があるのではないかと思います。また、こうした多様な事業を少数の学芸員だけで支えていくのは難しく、生産性という観点でも課題があります。美術館側が頑張るだけでなく、支える市民、教員、外部の協力者など、広い意味での手伝う人たちを増やし、内製化していく仕組みが必要ではないかと思います。イマーシブ展示に関しては、また時間がある際に改めて意見交換できればと思います。

- ◆委員：イマーシブ展示についてですが、個人的には八戸市美術館では安易に手を出すべきではないと考えています。バーチャルで感動体験をつくるには多大なコストが必要であり、それよりも現在の取り組みを継続すべきだと思います。私は特にコレクションラボを高く評価しており、有名作品がなくとも、キュレーションや関係性の提示、見方の提案次第で、とても面白い展示になるものと考えています。美術館建設前から、地域資源を丁寧に活用する方向性を一貫して提案してきた立場としては、コレクションラボは素晴らしい成果だと感じています。今回の「ポケモン×工芸展」は、国立工芸館をはじめとする国立美術館8館の評価委員会においても高く評価されている企画で、国立工芸館だからこそ実現できたものであり、サブカルチャーと本格的な工芸技術が融合した、画期的な展覧会となっています。それを巡回展として誘致できたことは、八戸市美術館としても大きな成果だったのではないかと思います。こうしたクオリティの展覧会を市民が体験できたことには大きな意義があり、今回の大ヒットは大変素晴らしいことだと思います。また、展覧会以外にも多くの事業を実施していて、学芸員だけでなく行政職の職員の地道な努力によって成り立っていることも、資料4の説明から改めて伝わってきました。いわゆる「交流人口」だけでなく、ワークショップや連携事業で関わった「関係人口」が非常に幅広く、各機関と丁寧につながりを築きながら事業を展開されている点は、全国的にも稀有な特徴だと思います。託児サービスなども市内の機関と連携して実施するなど、関係構築を優先して取り組んでいる姿勢が大変素晴らしいと感じました。これらの連携先を一覧化すれば、相当な数になるのではないかと思いますし、「みんなでつくる美術館」であることを可視化する良い材料になると思います。財政部門や市議会への説明資料としてだけでなく、美術館の情報発信としても活用できるはずです。関係人口を増やしていくこそが、この美術館とアートプロジェクトにおいて最も重要な指標になると考えます。

えています。最後に一点、質問させていただきます。開館当初、市外から来た人が、期待していたのと違ってがっかりして帰ったなど、様々な逆風があった時期もあったと記憶していますが、最近の外部からの評価や反応について、現在はどのような状況でしょうか。

○事務局： 最近は、市民の方や議員の皆さんから、ありがたいことに良い評価をいただくことが増えております。当初はいろいろなご意見もいただいておりましたが、来館される方の好みが多様であることも背景にあり、その声に一つひとつ丁寧に向かいながら、館の職員全員で力を合わせて取り組んできたところです。具体的には、「ポケモン×工芸展」のような幅広い層の方に楽しんでいただける企画の実施や、コレクションラボでの様々な見せ方の工夫、市民の皆さんと一緒に創りだすような企画、また関係各課や民間の方々との連携による取り組みなど、年間を通してバランスよく事業を組み立ててまいりました。こうした積み重ねが、現在の評価につながっているのではないかと感じております。また、来館者が増えることで、美術館の魅力を直接体験してファンになってくださる方も増えております。以前は評判だけで来館を控えていた方もおりましたが、足を運んでいただくきっかけとなる企画を用意してきたことで、美術館をより深く理解してくださる方が増えていると感じております。

◆委員： 皆さんのお話を順番に伺っていても、美術館に求められる役割がますます多様になってきていると実感しております。今回ご報告いただいた事業内容を見ても、本当に幅広い活動をされていると感じました。その中で、登録博物館に関する審査について触れられていましたが、私もその審査に関わらせていただいたため、補足としてお話をさせていただきます。「研究紀要」についての意見が審査員から出たとのことでしたが、これは大学の先生からの指摘で、調査研究の成果を公開し蓄積していくことが重要であるという観点から出た意見でした。研究紀要を発行することが登録博物館の審査に直接影響するわけではありませんが、調査研究の成果を発信する仕組みを持つべきではないかというご指摘でした。八戸市美術館では、来年度から研究紀要の整備を進めることですが、学芸員の立場から申し上げますと、研究紀要をつくることは本当に大変な作業です。青森県立美術館でも開館以来まだ発行できておりません。市民の皆さんにも理解いただける形で内容を整理し、公開していくには相当な時間と労力が必要で、研究紀要を発行するとなれば、事業が一つ増えるほどの大きな負担になります。近年、美術館に求められる役割が多様化する中で、調査研究の成果を発信する方法も様々あり、展覧会、アートプロジェクト、ワークショップそのものも調査研究成果の発信にはなりますが、展覧会カタログや記録集といった形で残すこと、蓄積として重要であり有効です。しかし、展覧会の制作や記録集の作成だけでも非常に大変な作業であり、負担は小さくありません。また、近年は市役所や県庁でも「事業担当制」が強まっているように感じますが、例えば4万人を超えた「ポケモン×工芸展」のような規模になると、担当者1人や少人数の体制では対応できないレベルになります。当館でも、展覧会は学芸員1人ではとても担当せんので、広報や

運営、事務などを含めたプロジェクトチームを組んで対応しています。その方が館内の連携にもつながり、結果として良い事業運営ができていると感じています。そのため、研究紀要を整備されるのであれば、作成できる体制そのものを整える必要があります。現状のまま研究紀要の作成を追加すると、現場の負担が増すだけで非常に厳しいと思います。これは現場で苦労している者としての自戒も込めた意見ですが、ぜひ体制整備も含めて検討していただきたいと考えております。以上、余計な話もあったかもしれません、補足として申し上げました。

◆委員： 本日の資料につきましては、美術館職員の皆さんが大変一生懸命作成してくださっており、詳しく状況を説明していただいたことに感謝しております。今後も、実りのある活動をしていただければと思います。また、美術館が開館したことを踏まえ、八戸の戦後から現在まで約80年にわたる美術史をまとめさせていただきたいと考えております。大変な作業になるとは思いますが、必要な取り組みですので、どの程度の内容にするかは打合せをしながら、可能な範囲で進めていただきたいとお願い申し上げます。併せて、その時代を支えてきた八戸の画家も数多くおりますので、地元作家の作品を適切に収蔵していくことも検討していただきたいと思います。東京や世界の著名な作家の作品も重要ですが、市民が身近に親しめる地元作家の作品も大切です。もちろん、予算の制約もあるため、何でも購入するわけにはいきませんが、長い年月をかけて制作に取り組んできた作家の努力に応えるという意味でも、良い作品を収蔵していくことは地域の誇りにもつながると思います。作家の中には高齢の方も多く、いずれ作品が散在してしまう恐れもありますので、その点も踏まえて検討していただければ幸いです。お金のかかる話であり僭越ではありますが、ぜひ前向きに考えていただきたいと思います。

◆会長： 今回のご報告や皆さんのご意見を伺い、八戸市美術館がこれまでにない特徴を持ち、新しい美術館の役割を生み出そうとしていることを改めて感じました。建物の設計段階から、こうしたビジョンを掲げてつくられてきた美術館であることがよくわかります。研究紀要については、作成が大きなプロジェクトとなり、負担も大きいという指摘がありましたが、紀要の役割を果たす方法は一つではなく、素材の集め方やまとめ方、形にする方法についても、もっと多様なやり方があるのではないかと感じています。例えばコレクションラボの鑑賞シートを先ほど拝見しましたが、すでに3,000枚が配布され、その一部がファイリングされているとのことでした。「ポケモン×工芸展」の来場者4万人という数字はわかりやすいですが、鑑賞シートを3,000枚持って帰られたというのも、別の意味で美術館の活動を示す重要なデータになると思います。また、没入感の話もありましたが、「古代エジプト美術館展」に多くの観覧者がありますが、クレオパトラなどの事前知識があるため、来館者自身の中でスイッチが入って没入しやすいのだと思います。同じように、コレクションラボでも、自然に作品の世界に入り込んでいくようなちょっとした仕掛けがあれば、人が自分自身に暗示をかけるようにして鑑賞が深まっていくという面があります。「古代エジプト美術館展」をきっかけに初めて来館した方が、その流れでコレクションラボにふらりと立ち寄り、違う形

の没入感を体験するということもあります。その体験が、帰り道の風景の見え方まで変えてしまうようなこともあるかと思います。八戸市美術館には、そういう研究の素材となる面白い現象が多くありますので、当館の学芸員として働きたいと思う人、八戸で関連事業に関わってみたい研究者、高校の美術の先生、地域づくりを研究する大学や行政の関係者など、多様な人が関わり、研究したくなるようなフィールドになっていると感じます。その取り組みが積み重なれば、結果として研究紀要の基盤となる素材が集まり、自然と蓄積が形成されていくのではないかと思います。一般的な美術館ではこれほど多様な人や活動が混ざり合うことは少ないですが、八戸市美術館では風通しを良くしようと意図的に仕組みがつくられており、そこから新しい価値や研究が生まれてくる可能性があります。今後は、こうした特徴や成果を丁寧に発信していくことが重要ではないかと考えております。

◆委員： 紀要と聞くと、学術論文的なものをイメージしてしまいます。出典を調べ、情報を整理し、体系的にまとめていくという手順になりますが、それをそのまま美術館の活動に当てはめるのは難しい部分もあると思います。そこで、紀要のフォーム、つまり考え方を思い切って変えてみてはどうかと思います。いわゆるアートブックやドキュメントのような形を取り入れ、それをあえて紀要として位置づけてしまうという方向性です。八戸市美術館として、「これが当館の紀要です」と強く打ち出すことで、新しい形の紀要をつくることも可能ではないかと思い、その点について、委員のご意見を伺いたいと思いました。

◆委員： 私も同感です。一般的に美術館の紀要というと、美術史的な研究成果をまとめたものであり、それを実績として大学教員を目指すという価値観が、私の出身大学の美術史学科では通説のようになっていましたが、現在の美術館では、必ずしもそのような形が学芸員の在り方として適しているとは思っていません。私はコレクションラボの細やかな工夫がとても好きで、まさにそういった要素こそ記録として残す価値があると感じています。大学の紀要は学位取得に関わるため慎重になりますが、美術館の紀要は学位に結びつくわけではありませんので、企画に込められた思いやノウハウ、どのような工夫で伝えようとしたのかといった部分を、負担にならない範囲で記録していくことが大切だと思います。学芸員の皆さんが高い美術館像をつくろうとして、細やかな工夫を積み重ねていることが強く伝わってきました。こうした新しいキュレーションの実践が外部に十分伝わっていないのは、非常にもったいないと感じます。佐藤館長がおっしゃる「第4世代の美術館」のイメージも、こうした方向性にあるのではないかでしょうか。専門的すぎる学術論文を目指すのではなく、日々の実践をライトな言葉で記録していく、高校生や一般の方が読んでも「こんな工夫がされているのか」「だからこの美術館は面白いのか」と感じられるようなものにできれば良いと思います。

◆委員： 従来型の文字が小さくびっしりと並んだ紀要を、今さら読みたいとは正直思えないという個人的な気持ちがありますので、先ほど申し上げたように、もっと違う形を検討してはどうかと考えています。例えば、今日紹介されたような取り組み

を集積していくことで、それ自体が一つの作品のようになっていく、いわばクリストのプロジェクトのような発想もあり得ると思います。そうした視点で紀要の形をガラッと変えていくと、大変面白いものができるのではないかと感じました。

◆委員： 旧来型の学術論文的な紀要に限った話ではありませんが、現場の立場からすると、今ご提案いただいているような新しい形式の紀要をつくることも同様に大変な作業です。展示した作品の解説をそのまま流用して印刷するという方法ではなく、展示の内容を別の形で媒体として発表する場合は、同じ内容であっても一からつくり直す必要があります。博物館であれば学術論文的な紀要を作成することも比較的に多いですが、美術館の場合は展覧会カタログなどをつくることもあります多く、常設展示で行った取り組みを新しい形でまとめること自体が、次にプラスアルファの価値を残すための重要な作業になります。むしろ、がっちりした学術論文でない方が、読みやすく、かつ新しい形で来館者や関係者に受け入れられるものにするためには、より大きな労力が必要になることもあります。その意味で、旧来型にとらわれない新しい紀要をつくるしていくのであれば、新しい事業に取り組むという意識を持っていただければと思います。

○事務局： 先日、私たちも紀要をつくるとしたら、どんなトピックスを盛り込めるか、どんな形にできるかということを話し合いました。委員の皆様からのご意見は、本当にその通りだと思います。旧八戸市美術館時代も紀要がなかったこともあり、コレクションラボを企画するにしても、作家の資料や参考となる情報をゼロから調べ直す必要があることもあります。新聞や展覧会資料などの参考文献が残っているだけでも、次のステップに進むことが可能になります。委員がおっしゃったように、八戸の戦後の美術史はいつか編纂すべきものであると私たちも考えています。コレクションラボやコレクションを活用した展覧会を重ねることで、私たちもこの4年間で理解の解像度が高くなってきました。また、八戸は関係者同士の距離が近いことから、作家に関する情報や雑誌資料など、思わぬ形で情報が入ってくることもありますので、こうした情報をもとに、私たちらしい形で記録を残し発信していくことは重要だと考えていますが、それを実現するための館内体制についても課題があることは、認識しているところです。

○館長： 学芸員の立場をかばってくださっているのは大変ありがたいことです。紀要については、必ずしも学術論文をつくるという意図はなく、むしろ、現在の事業の中でできる範囲のドキュメント的な記録をつくることを考えています。ご意見のとおり、記録を残さないと伝わらないという課題があり、実際に足を運んで鑑賞された方は感じ取ってくださっているかもしれません、それ以外の方には十分に届いていないというのも事実ですので、いただいたご意見は、そうした点を改善していくための参考にしたいと思います。

◆委員： 3月に私どもの文化政策学会を受け入れていただき、ありがとうございました。参加者一同、大変喜んでおりました。その際、開催していた青森の教育版画展では、監視員の方が絶妙な距離感で声をかけてくださり、自然に展示の説明をしてくれる姿勢が印象的でした。その対応によって没入感を味わうことができ、監視

員の方々も展覧会づくりの重要な一員であることを改めて実感しました。今後も監視員の方々を大切にし、共に展覧会をつくり上げていく体制を継続していただければ、来館者にとってより素晴らしい体験になると思います。

○館長： 最後に資料5の説明だけさせていただきます。内容はこれまでのご意見と重複する部分もありますので、簡単に補足いたします。資料5には、協議事項として扱う予定だった内容が示されています。前回の運営協議会で、今期目標とミッションを確認し、今後5年間の第2期中期運営計画を作成いたしました。今期目標としては、「地域文化が次世代へ継承・発展する」、「クリエイティブな人が増える」、「地域の社会的包摶を推進する」の3点を挙げており、これらを達成するためのミッションは4つに分かれ、それぞれ今年度実施している事業に関連付けて示した資料となっていますので、補足としてご確認ください。

◆会長： 資料5のような計画や目標を、常に傍らに置いて確認できる状態にしておくことは非常に重要なと思います。また、八戸という地域で現在こうした活動や機運があることは、日本全体にとっても非常に重要な意味を持っていると感じます。美術館関係者だけでなく、高校生や地域の方々も含め、地域での活動を通じて、日本の地方創生にも寄与できるという意識を持たないと、インフラが整ったところに一極集中してしまうと思います。地方にある文化や歴史、自然環境の中で生まれ育まれた作品や体験の価値を実感することが重要だと思います。東京の博物館で展示を見ても、整備された環境下で作品を鑑賞するだけに過ぎず、その作品が生まれた地域の環境や習慣、四季の変化を体験することはできません。地域全体で美術館を中心に連携して活動することで、来館者はその文化や作品に没入することができます。小学生から高校生、大学生、企業の方々までが関わり、行政も応援する形で活動が進むことが、八戸の好事例として全国に広がることを期待しています。以上で、本日の協議会の全ての議題は進行いたしましたので、事務局にお返ししてよろしいでしょうか。

○事務局： 委員の皆様、本日は貴重なご意見をいただき、誠にありがとうございました。皆様からいただいたご意見を参考にしながら、今後の事業を進めてまいりたいと思っております。また、令和11年度には市制100周年を迎えることから、八戸市美術館らしい、そして100年にふさわしい事業についても検討してまいります。次回の運営協議会は3月に開催予定ですので、引き続きどうぞよろしくお願ひいたします。

○事務局： それでは、委員の皆様、長時間にわたりまして誠にありがとうございました本日の会議はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。